

解決されることであろう」と、きわめて楽観的な見解が述べられている。藤楓協会の言う残された問題こそが、あまりにも大きいのであるが、同協会は、それを具体的には示さず、自らの見解もいっさい記さなかった。このように、藤楓協会は、「癩予防法」改正のとき、その立場は厚生省の方針を支持していたのである。

その姿勢は以後も一貫する。それを1954（昭和29）年に顕在化した熊本市の龍田寮児童通学拒否事件への対応に見てみよう。1954（昭和29）年10月27日付全患協事務局の「支部報」249号掲載の菊池支部長玉城正秀「藤楓協会に対する抗議について」によれば、藤楓協会の会長下村宏と常務理事浜野規矩雄は、児童通学を実現するべく訪問してきた菊池恵楓園長宮崎松記と通学賛成派に対し、「君たちは何しに来たんだ、熊本の恥さらしに来たのか」と怒ったという。また、1954（昭和29）年11月9日付「支部報」に掲載の全患協事務局長盾木弘「藤楓協会高野理事長と東北支部の面談について」によれば、10月29日に東北新生園の入所者自治会と会談した藤楓協会理事長高野六郎は、龍田寮の問題について「あの問題は難しい。反対派が七、八割で知事も市長もさじを投げているようであり、反対派の中には医者でありながら『之は法律や科学で解決すべき問題ではない』とつぶやいている様な有様ですべてが感情である。こうなればもう梃でも動くものではない。従つて私はまともな話し合いの出来る様に尽くしたいと思つている」と語つたという。いずれの記事にしても、藤楓協会の龍田寮児童通学問題に対する対応は冷ややかである。

しかし、高野は「まともな話し合いの出来る様に尽くしたい」とも語っている。では、どのような働きかけをしたのか。藤楓協会は、1955（昭和30）年によく対応を示す。通学賛成派の「ゆかり会」が2月下旬にまとめた「続其後の経過」によれば、常務理事の浜野が解決案を提示している。しかし、それは熊本商科大学の高橋学長が大学施設に引き取ることを申し出た新1年生の子どもたちを「東京又は京都の協会寮に受入収容したい」というもので、事実上、新1年生の黒髪小学校入学を否定する提案であった。当然、賛成派はこの提案には同意しなかった。ところが、3月18日、藤楓協会の理事長高野は宮崎松記に対し、藤楓協会が「保育児童の職業補導並びに保護育成のための施設を所謂都会地に設置すること」とし、その準備が完了したと伝えている。しかも、その施設を「同一場所に多数設置することは、諸般の情勢に顧み、必ずしも適当でないと考えられますので、取敢えず右施設を分散設置した」という。藤楓協会は、賛成派が同意していないにもかかわらず、龍田寮の子どもたちを分散させる準備を進めたのである。藤楓協会の姿勢は、龍田寮の子どもたちの前途に配慮したかのポーズをとりながらも、その基調は龍田寮を解体させ、子どもたちを分散させることを目的にするものであった。

#### 四 皇族の療養所訪問

こうした藤楓協会が国民に強く訴えたのが皇室の「仁慈」である。一般的に、日本の医療・福祉関係の施設・団体には多くの皇族が顔を並べている。日本赤十字社を筆頭に多くの皇族が名誉総裁などの地位を占め、また、皇族が旅行すると必ずと言っていいほど、病院や福祉施設を慰問する。戦前は、男性皇族は軍務に就き、女性皇族は軍事救護や福祉に関わるという、まさに厳父と慈母と

#### 第四 1953年の「らい予防法」

いうイェ制度に基づくジェンダー的役割分担をおこなってきたが、戦後は男女とも、福祉の顔を国民に向けることになった。

ハンセン病に関しては、特にそれが顕著である。藤楓協会のみならず、菊池恵楓園、邑久光明園の園名には、いまだに皇后たちの印章や諡号が使われている。戦後の皇族は、どれほどハンセン病と関わってきたのか。

皇族のなかでは高松宮宣仁が頻繁に療養所を訪れている。高松宮は、藤楓協会の初代総裁であり、1987（昭和62）年に死去した後は、妻の喜久子が総裁を継いだ。貞明皇后に続き、高松宮は皇室のハンセン病患者への「仁慈」の象徴となった。

ここで、特に注目すべきは占領期の高松宮の行動である。高松宮は1947（昭和22）年から1951（昭和26）年までの5年間に、全国9か所の療養所を廻っている。これは、高松宮の自発的なものだったとは考えられない。皇族の行動には、それなりの意味がある。

これについて、GHQの公衆衛生福祉局（PHW）の局長クロフォード・F・サムスは、「わたしは天皇の兄弟の中の一人（高松宮）を福祉の領域での天皇家の代表として活用した」と回想している（「クロフォード・F・サムズ博士の“証言”」、社会福祉研究所編『占領期における社会福祉資料に関する報告書』、同研究所、1978年）。

公刊された『高松宮日記』（中央公論社）は1947（昭和22）年までであるが、そこにはサムスの名前が4回登場する。1946（昭和21）年4月5日・4月7日・5月23日・6月14日である。高松宮は4月7日にはサムスに会い、5月23日には晚餐をともにしている。

『高松宮日記』の巻末略年譜によれば、敗戦直前の1945（昭和20）年7月21日、高松宮は日本赤十字社総裁に就任、さらに敗戦後の8月21日には恩賜財団済生会総裁、8月25日には恩賜財団慶福会、1946（昭和21）年3月13日には恩賜財団同胞援護会総裁、1947（昭和22）年9月13日には共同募金中央委員会総裁に、それぞれ就任したと記されている。これはサムスの回想を裏付けるものである。この後、1948（昭和23）年7月、高松宮は各団体の総裁役を退き、以後はスキー競技の普及に努めている。

また、星塚敬愛園自治会の『名もなき星たちよ』（1985年）は、1948（昭和23）年6月2日の高松宮夫妻の敬愛園訪問について、「庶民的な高松宮は休憩時間に出された茶菓子のなかから、焼芋を選ばれて塩沼園長を恐縮させた。また、重病棟慰問では、予定コースの冠病棟（眼科）とは反対側の白鳥病棟（外科）に入れ、園長をはじめ、厚生省、県からの随行者をすっかり慌てさせた。……（中略）……高松宮は施設で用意した予防着は着けられず、平服のままであった。礼拝堂の歓迎式場を出られた両殿下は、自治会代表の陳情を息がかかるほどの至近距離で受けられ、つめかけた報道陣や関係者を驚かせた」と伝えている。